

卒業してゆく君たちへ そして、未来をつくるすべての児童のみなさんへ

やわらかな朝の光が君たちがこの1年を過ごした教室に差し込む。窓を開けると遙（はる）かウグイスの鳴き声。今日も穏（おだ）やかな日となりそうだ。こんなにも早い第2グラウンドの山桜の開花が、君たちの卒業への祝意（しゅくい）に思えて仕方がない。そう、来週君たちはこの藤城小学校を卒業してゆく。

小学校最後のこの1年間は新型コロナウイルスの感染拡大に伴う二か月間の臨時休校から始まった。つい最近までの緊急事態宣言の影響で、卒業式についても縮小を余儀なくされている。話が長い？といわれる私だが、短めの「式辞」にするつもりである。式辞は「耳から入る言葉」だ。聴（き）いてわかりやすい内容となる。少し複雑なことについては、「目から入る文章」が必要だ。ずっと書き続けた『雲の上にはいつも...』もそんな思いで書き続けた。だからというわけではないのだが、式辞としては述べようのないことを伝えておきたい。（おいおい！まだ言い足りないのかと、自分でも驚きだ）少し長くなることを容赦（ようしゃ）願いたい。

地球の反対側、南米のウルグアイという国の元大統領ホセ・ムヒカさんという人がいる。5年前には来日もされた。給料の大半を貧しい人のために寄付し、郊外の農場で奥さんと二人、花や野菜を育て、古びた愛車を自ら運転して大統領の仕事に向かう。「世界でいちばん貧しい大統領」と呼ばれた彼は、2012年の国連サミットの演説の中で、次のようなことを話したんだ。

「私たちは発展するためにこの世に生まれてきたわけではない。幸せになるために生まれてきたのです。貧乏とは少ししか持っていないことではなく、無限に多く欲しがり、いくらあっても満足しないことです。モノは私たちを幸せにはしてくれない」と。

私たちはモノの豊かさが幸せにつながると思い込んできた（思い込まされてきた？）。お金を儲（もう）け、より多くのモノを手にしたいと。きっと君たちの多くもそうだろう。そのためには、短時間でより多くのモノを作り出すことが重要になる。少しでも安く商品を生産し販売することが「評価の高い仕事」となった。私たち大人はそんな競争を続け、社会を発展させてきた。しかし、その競争の結果が今の現実だ。地球温暖化を含めた環境破壊は深刻なものとなり、社会の格差は拡がる一方。ＩＣＴの急激な発展によって生産効率は上がったはずなのに、いっそう時間の余裕（ゆう）はなくなり、忙（いそが）しさ感も増える一方だ。

そんな今、私たちが幸せになるには、どうしたらいいのだろう。まだ続くであろうコロナ禍の中で、しみじみと、心の底からしみてくるような幸せや満足感は、どうしたら得られるのか。

ひとつのヒントが、ミヒヤエル・エンデというドイツの児童文学作家が書いた『モモ』という作品のなかにある。人々に効率的に生きることを説いてまわり、浮いた時間を盗んでいく「灰色の男たち」。みんなが心の余裕を失っていく中、一人の女の子「モモ」が立ち上がる・・・。ぜひ一度、手に取って読んでもらいたい。（児童書なのですが、大人こそ読むべき本かもしれません。私も近年読みました）ちょっと立ち止まって、幸せのために日々の生活の中でなにを大切にするのかを、一人ひとりが静かに考えてみましょう。もちろん、私たち大人もです。

そしてもう一つ。十年前の今ごろは、日本中が「幸せ」という言葉を口にできませんでした。3月11日の東日本大震災。今年は10年の節目ということで、津波の映像が何度も報道されました。すべてをのみ込んだ、あの黒い津波。あのときの惨状（さんじょう）を知ってしまったからには、「幸せ」という言葉はもちろん、「希望」や「夢」という言葉を使うことさえ、許されないように感じていました。一瞬にしてあの黒い津波が、人々の命、思い出、笑顔という、「幸せのすべて」をのみ込んでしまったからです。

あの日から十年。当時の記録を確認していく、ああ、そうだったとあらためて発見したことがある。あのと

き、日本各地からはすぐに救援隊が駆けつけた。そんな中、海外からいち早くやって来たのは、お隣の中国・韓国。アメリカ軍は三陸沖に空母を派遣し、ヘリポートを提供。ロシアは天然ガスの供給を提示した。震災の半月前に大きな地震に見舞われたニュージーランドは、自分の国がたいへんな状況にもかかわらず、なんと国の救助隊の3分の1をも派遣してくれた。あのときは確かにあったのだ。つらい思いをしている人に寄り添う姿が。国・主義・思想・立場を超えて、支え合う姿が。そんな中、当時の私がいかなる行動をしたのか。ただ募金をするぐらいだったことには、悔恨（かいこん）の念がある。

今、世界のつながりは危ういものになってきている。しかし、十年前の世界各国からのこのような支援や支え合いは、これから世界のつながりや、地球上で共に生きることについての希望となるのではないか。見失いかけている、地球上で共に生きるひとつの種（しゅ）としての人間が進むべき方向を示唆（しさ）しているように思われてならない。そう、世界は捨てたもんじゃない。

以上、大人である私の反省もこめ、式辞などではふれないお話を述べてしまいました。
来週には卒業式と修了式を迎えます。

2021年3月19日

校長 加藤 尚登